

「最高法院の裁判」

2016年01月07日

ルカによる福音書 22章 66節～71節。夜が明けると、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちが集まった。そして、イエスを最高法院に連れ出して、「お前がメシアなら、そうだとするがよい」と言った。イエスは言われた。「わたしが言っても、あなたたちは決して信じないだろう。わたしが尋ねても、決して答えないだろう。しかし、今から後、人の子は全能の神の右に座る。」そこで皆の者が、「では、お前は神の子か」と言うと、イエスは言われた。「わたしがそうだとは、あなたたちが言っている。」人々は、「これでもまだ証言が必要だろうか。我々は本人の口から聞いたのだ」と言った。

イスラエル最高法院（サンヒドリン）は大祭司が議長を務め、71名の祭司長、長老、律法学者たちによって構成される行政と司法の権限を持つ最高会議である。主イエスを裁く最高法院の裁判に関して、マタイ、マルコ福音書は、連行された大祭司の中庭で、深夜行われたと記している。ルカ福音書は「夜が明けると」と早朝に行われたと記している。深夜の裁判は律法で成立できないことを知るルカは朝に行われたと書き直したのではないか。事実は、深夜、大祭司の中庭で行われたものと思われる。神殿当局は、何としても主イエスを葬り去りたいと律法に反して、最高法院を開いたのである。

この裁判に関して、四つの福音書は描き方が少しずつ異なっている。おそらく下記のように進行したであろう。彼らは、主イエスを取り巻き、暴言を放ち、証人を呼び、主イエスが律法を侵したと証言させた。当時の裁判は、物証ではなく、証言によって罪状が認定された。主イエスに関する罪状が諸々上げられたが、証言が合わず、一致しなかった。正当な裁判ではなく、集団リンチのような「降格儀式」であったので、支離滅々な罵詈雑言が飛び交う中で、主イエスはどんなに不利な証言がなされようとも、反論や言い訳をせず、ただ黙し続けられた。

死刑を宣告できないことに焦った大祭司は立ち上がり、「お前がメシア（救い者）ならそういうがよい」と質した。それに対し、主イエスはイエスともノーとも答えていないように見える。ルカ福音書は「しかし、今から後、人の子は全能の神の右に座る」と答えたと記している。更に「では、お前は神の子か」という問に対して、主イエスは「わたしがそうだとは、あなたたちが言っている」と、私ではなく、あなた方が言っているに過ぎないと答えている。ヨハネ福音書では、主イエスは民衆に会堂や神殿の境内で公然と教えてきた。何を話したかは、聞いた人々に尋ねればよいと答え、その返事の仕方が横柄であると平手で打たれたと記している。

主イエスの応答の中で、「今から後、人の子が全能の神の右に座る」という言葉が決定的であった。ダニエル書で黙示文学的に「夜の幻をなお見ていると、見よ、『人の子』のような者が天の雲に乗り」と表現された人の子・メシアは私であると言っていると受け取ったのである。自分がメシアであるということは神と同等の者、自分を神とすることであり、神への冒瀆罪に当たる。神への冒瀆罪は、即、死刑である。神殿当局は、この言葉を引き出し、死刑判決が出せると大喜びをした。最高法院の議員たちは、「これでもまだ証言が必要だろうか。我々は本人の口から聞いたのだ」と言い合った。本人の口から、自分を神とする冒瀆の言葉を聞いた。死刑以外にはないと結論づけた訳である。主イエスは死を覚悟し、侮辱と暴力と不法の中に毅然と立っておられる。